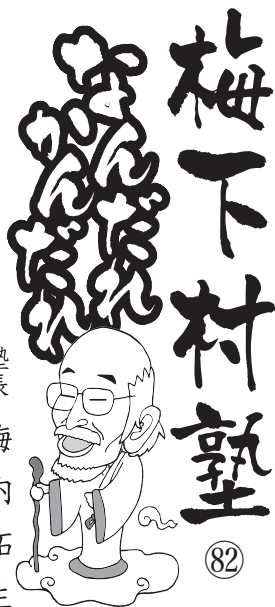


# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

### 気仙地方文化と 21世紀文明(4)

(腑に落ちるもの)

朝のテレビで微粒子による健康被害やTPPと日本の産業・経済との関係についてのコメントーターの話聞いた。コメントーターがそれぞれの立場から意見を述べていた。

科学技術の粋をあつめても、将来の個別的事項の予測は困難であり、全体としての生じる方向の可能性についての話ならわかる。その話から、何を納得するかは、論理性が関係してくるが、その話し手の生活態度も関係してゐると思う。

要するに、世の中は理と情が絡み合った関係からなりたっているのである。そのなかで、言葉が腑におちて響いて来るのは、その人が世のために何を

しているかということである。

世の中のために何をしているかということとは、どのように心を開いて、お互いに生きていくことを共有しているかということである。それは、自分のための欲望を何かのかたちで抑制し、そこからうまれてくる心(エネルギー)を世の中と共有することである。別な言い方をするならば、コメントーターの生き方がどれだけコメントとつながっているかである。

今やツイッターは情報交換に大きな役割を果たしている。しかしツイッターは便利であるが、見知らぬ人の意見を支えている、生き方は伝わっていない。その情報発信者の生き方が伝わってゐると、納得がいくのである。地域新聞に期待され

る役割の一つが地域の意見を取り上げて、人々に伝えることである。地域の人々は意見を述べている人の生き方は、日ごろの生活からわかっていることが多い。新聞に掲載された地域の人々の主張や意見に納得するかどうかは、地域の人々自身の受け取り方による。

### (芸術と構造)

縄文文化を宗教、芸術、歴史の視点から広く、深く追求を続けた、詩人の宗左近氏が西欧の詩に関して、ドイツの詩人であるカール・ブッセの「山のあるな」を引き合いに出して、西欧の詩が追求している構造への想いを述べている。

『まるでサンドイッチみたい。強くそう思っ、たいへん驚いたことを覚えています。『幸』という言葉が、それだけとりあげられて自立しています。それを探しに行っ、

「涙さしぐみ」返ってきたといつて、その会えなかった理由を、すばと省略している。鮮やか。くどくない。そこに感心しました。しかし、その次を読んでも、さらに驚きました。

明らかに、文章の間に大きな空白を置いているのです。つまり、2日か、1カ月かの時間の経過があるのに、それを何も示さないで、「山のあなたになほ遠く」といっている。「なほ」とは、空間の距離を示します。しかし、それと同時に、時間の距離も含んでいます。

子供にも、それはわかります。わかって、だから、感心しました。こういう、事実を立ち上げらせる技法を、それまでの日本語の文章では、教わらなかったからです。中学生になつて知った言葉を使えば、この作品、「西洋画のように造形性が強い」のではないでしょう。

この、宗左近氏の指摘に心えるには、「梅下村塾」の⑦⑧で述べた「芭蕉の俳句とゼザンヌの絵はつながるか?」これを掘り出

すことから、始めなければならぬ。いうなれば、西欧文化の中で育まれてきた構造の概念と日本の文化で育まれてきた創造の概念とから、その共通性と違いを掘り出すことである。「梅下村塾」の俳句、短歌、川柳への評はこれにつながるものである。

### (東海新報記事から)

2月26日(火)の第2面の「気仙坂」に江戸後期の僧侶、良寛禅師には嫌いなものが三つあったと述べている。「詩仁の詩」、「書家の書」、「料理人の料理」である。要は、自分の技能の高さに捉われ、それにおぼれないように注意せよということである。気仙坂の筆者は東海新報のベテラン記者の方と思われる。

良寛禅師の教えは、自分が経験を積んでベテランになったら、より自由な境地を創りだせといっていると考えたい。僧侶であれ、新聞記者であれ、世の中の変化を追い、経験を積み、その積んだものを、未来の世界へ受

け継ぐことが求められる。これにこたえるには「自由」と「抑制」との関係の中に「妙」を感じ、それを創りだすことである。

3月2日の朝日新聞の「天声人語」に五里霧中(ごりごり、むちゅう)ではなく(ごりむ・ちゅう)のことであると云う記事が掲載されている。

「中国の後漢書に張楷という在野の学者は道術を使って五里四方に濃霧を発生させた。人を避けたいときは霧の中に姿を隠したそうだ。現在の中国共産党政府も黄砂と微粒子の濃霧をバラまいて、責任の所在をくらましている。

天声人語は「中国も世界第2位の経済大国として自他の国の環境と健康への責任を五里霧中に隠れて頬被(ほおむり)ではゆるされない。藍天(晴天)をまもるべし、なりふり構わぬ発展から、舵を切つて」と述べている。世界第2位の経済大国は、その地位に見合う見識を持ち、責任を取らなければならぬ。気仙坂の良寛禅師の教えが響いて来る。